存在の秋

前登志夫

存在の秋

昭和五十二年十二月十五日初版
昭和五十三年十一月三十日再版

著　者　前　登志夫
発行者　長谷川郁夫
発行所　小沢書店
東京都千代田区富士見二―五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）
印刷所　精興社
製本所　大口製本
製函所　日東工業

© T. Mae, 1977　　Printed in Japan

存在の秋　目次

I　吉野日記抄

冬の火　11
山の新春、山の伝承　14
ささやかな晴耕雨読　18
春を待つ心　22
花おそげなる　26
花近し　31
ホトトギスの夜　35
山の弦楽奏者　40
麦秋　42
虹　46

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

石をまつる 49
山の暮しの寂寥 53
秋たてるはや 57
日を読む 60
死者たちのさわぐ夕暮れ 64
花鳥の奥に 68
自然の泪 71
雪嶺に問う 76

II 存在の秋

存在の秋 83
山人の意識の半球 94

交霊の密儀 101
虚の空間 105
その大刀はや 118
修羅の光芒 123
国原の時間 132
擣衣のこころ 147
覇道とさくら 151
修験と花 162
悲歌のこころ 167
Ⅲ 帰鳥のかなたに
黒潮の霊異 183

暮しの臍の緒 191
早春の記 196
野をなつかしむ 201
空の冥府 206
北山郷の一夜 209
山人幻想 212
月の出 215
眠れ、星宿のしたたる闇に 217
吉野の山人 222
あとがき 227

裴頠 司 修

存在の秋

吉野日記抄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

吉野日記抄

冬の火

凍てついた暁闇をついて、た、た、た――と山道を歩いてくる。

息の白さがかすかにわかる。みえるはずがない。夜の闇を全身に吸いとったように黒い旅人である。鬱蒼とした杉山の道をのぼって、ようやく峠を越えてきたその旅人の足どりはかるい。

少年の頃、わたしはそんな旅人をひとりもっていた。わたしの知らないうちに、わたしとぬきさしならぬ因縁をもった気味の悪い存在でもあったし、世の中の誰とも、もはやかかわりのない永遠の通行者とも思われた。罪という情念の芽生えたのも、そんな旅人のイメージによってつくられていた。少年時のいわれもない恐怖感がつくり出した幻影だったが、だんだん馴れるにしたがいその黒の来訪者は、いちばんたしかに朝を予告していくものでもあった。そんな悪霊におびえなくなってから、わたしは朝という世界の感覚を失ってひさしい。朝は、遅刻し

ないように学校へ行く時であり、味噌汁をすするときであり、霜柱をふむと硝子のようにくだけて鳴る時刻にすぎなくなった。

朝という原初を今でも感じさせてくれるのは、やはり新年である。季節的にはいよいよ冬ふかむのであるが、心情としては新しい年、すなわち春である。もともと冬というのは、秋の収穫が終わり、山野が凋落し、昼がいちばん短くなる冬至の頃、ふたたび太陽の威力がよみがえる春への転回の時点をさすのであっただろう。あらたな生命が再生し心身に触れる。死と復活の画期的な瞬間を意味する言葉であった。春の予兆という点を重視すれば、立春の頃がふさわしい。今でも吉野の山中では月暦の旧正月をなつかしみ、お餅を二度搗いたりしており、その頃は雪も多く仕事の上では暮しにそくしているのであるが、近頃ではどうも新年という気分が出ない。やはりわたし達の心の更新には儀式が必要なのであろう。よく村びとが口にするきっしょがないといけないようだ。何をするにも村びとはきっしょを求め、そうしたエポックなしには話がまとまりにくい。とりわけ土俗的な共同体の心情ののこっている処では、民俗の行事がうすれるにつれて、きっしょを支えにする。けだし、節句とか八朔とかの吉祥日をさす言葉であろう。

橿原神宮や三輪明神への初詣が年ごとにはなやかになり、その大群衆をわずらわしくさえ思うが、きっしょをもとめる生命復活のしぜんなあらわれなのである。日常的な時間としての朝

ではなく、人間が夜の暗闇からぬけ出して、真新しい光の中に呼吸しているという実感ほど清清しく人間らしいものはない。初詣はさしあたり、存在の中の朝との出会いであるといえよう。わたしたちはじっとしていては、この出会いの体験はなかなか実現できない。どんな小さな祠にでも足をはこぶという手続きがいる。わたしは初詣の群衆をみながら、行為と存在についての民俗の智慧に感心する。

さくさくと清浄な雪を踏んで、丹生川上社や、吉野水分神社などへ詣でた日の冬の時間が、金色に輝やいてみえる。

わたしの少年時の夜の幻想は、雪の上の足かたや、雨戸をうつ木枯しや、屋根をたたいて走る霰など冬の風物が作り手であった。狐や狼の話や、大峯行者の伝説もそれに加わるだろう。山国のいちばん荒涼とした冬が、最も豊かな泉をもっていた。沢山の怪獣をもつ今の子供は、そうした冬の夜をもたないのか。わたしたちの心を洗う元旦も、除夜の鐘や、三輪大神の繞道（にょうどう）祭（さい）の火をはじめ多くの氏神で焚かれる篝火など、夜の深さから生み出されるものだ。とりわけ冬の夜の火は、二月堂修二会の火まで、大和全域にわたって炎える。それは神の火であるとともに、春を待つ人間の情念の火でもある。

（「奈良県観光新聞」昭和四十三年一月）

山の新春、山の伝承

山の正月はながい。

正月の気分がなんとなく続くのである。そうさせるのは、雪である。

山では、時間が緩やかな息づかいをする。樹や、河や、岩など、自然の存在するものが、かたちづくる時間だから——。

オートバイが急坂にうなりをたてても、チェンソー（鋸）がわめいても、むなしいのだ。そのあとにくる静けさは、いっそうふかまる。

わたしの初山は、心をあらたにして、この国の文芸の細き一すじを、木のまの雪にふみしめるだけである。初山の風習も今では儀式としては影をひそめている。正月二日、あるいは松の内に、木伐初めとして柴を伐りとってくる作法である。もちろんその山へは、餅や酒を供え、注連（しめ）を張るのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com